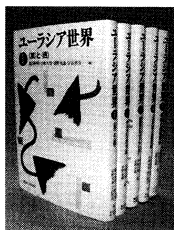


【鼎談】

# ユーラシア世界



シリーズ『ユーラシア世界』(全5巻) 編集委員

塩川伸明

(東京大学大学院法学政治学研究科教授)

小松久男

(東京外国語大学大学院総合国際学研究院特任教授)

沼野充義

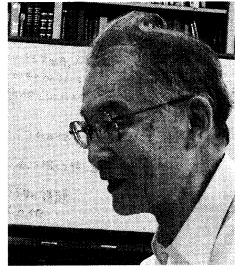
(東京大学大学院人文社会系研究科教授)

—— 本日は、『ユーラシア世界』全五巻、シリーズ完結ということで、編集委員の先生方に鼎談をお願いしたいと思います。まず、シリーズ全体のねらいについてお聞かせください。

塩川 このシリーズ全体を特徴付ける言葉をいろいろと考えましたが、いちばん大きなキヤッチフレーズとして据えたのが「地域の枠を超える地域研究」でした。それからキーワードとしては、「越境」と「変容」をうたい文句にしています。つまり、一種の地域研究ではあるけれども、特定の「地域」を固定的な前提として考えず、その枠を超えることによつて、既存の地域研究とはかなり違ったものができるのではないかと考えたわけです。

「ユーラシア世界」は、そもそもその対象自体が、地域の境を決めがたく、伸縮自在で、枠を超えてしまうところがあります。

「ユーラシア(Eurasia)」という言葉は、いうまでもなく「ヨーロッパ(Europe)」と「アジア(Asia)」という言葉の結合からなるわけですが、これは、「ヨーロッパかアジアか」、「西か東か」というふうには、スッパリ



塩川伸明氏

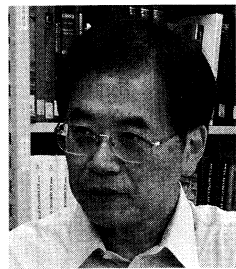
分かれるものとして考えられがちな概念に対して、実はそれらはそんなに明確に分けられるものではなく、相互浸透、相互乗入れのよくなるものがあるのではないかとこのことを意識させる言葉です。

「ヨーロッパ的なるもの」という言葉は、特定の地域を指すと同時に、人類普遍的価値とか文明を指すととらえられがちだという二面性がありますが、そういう「ヨーロッパ的なるもの」と「そうでないもの」という二項対置をどう超えていくかというのは、人文社会系の学問全体にとって根本的な問いなわけですね。そういう問いについて考える上で、「ユーラシア世界」は豊富な素材を提供していると思います。

ただし、一つ留保をつけておく必要があります

ます。「ユーラシア主義」という思想がありますが、これは、「ユーラシアであるロシアは、西と東を超える、より高次の存在である」というような、やや独善的な発想に傾斜しがちなところがあります。われわれが「ユーラシア」という言葉を使うからといって、そういう考え方を前提にするわけではありません。その点を断つた上で、「ユーラシア主義」などというクセのある考え方が登場すること自体が、ある特異な状況の反映だという意味では、これもまた一つの興味深い現象だと思えます。

**小松** この『ユーラシア世界』のシリーズを考えるとときにいちばん重要だと思ったことは、いま塩川さんが言われた「境界を越える」ということに関係して、学問領域、あるいはデイシプリンを超えるという、そういう意味での新しさが必要ではないかということですね。現在、人文学には厳しい逆風が吹いています。これに対して、人文学の豊かさをアピールしていくには、いろいろな学問領域の人々が協同すること、お互いに聞き合うことが大切ではないかと思えます。「ユーラシア世界」というのは、そういう意味では格好の



小松久男氏

研究対象で、これを対象にすると実にさまざまな学問領域の人々が協同できる、そういう面白さがあり、これによって人文学の新しい可能性を引き出すことができるのではないかと考えた次第です。

これまでの人文学は、基本的には個人の研究であり、実に興味深い成果がたくさん生まれているのですが、お互いにゆつくりとそれを聞き合うという機会が少なかったように思います。今回、このような形で実にさまざまなか方向からの論考が集まりました。それを読んでいくと、多様なインスピレーションがわき、新しい発見があることでしょう。これは編集委員としても大変うれしいことですし、ぜひ読者の皆さんにもそのあたりを楽しんでいただきたいと思えます。



沼野充義氏

**沼野** このシリーズをつくるにあたって、「タイトル、どうしようか」という話も結構長く議論しましたね。「越境と変容の場」をメインに出すか、サブに回すか。結局その文はタイトルには入れませんでした。コンセプト自体は基本的にずっとあったと思うんです。いま小松さんが言われたように、「越境」にはいろいろなレベルがあつて、参加する研究者自身にとっての越境というものもある。研究対象が越境するものであると同時に、研究者自身もまた越境する。

歴史研究と比べて文学研究は、どちらかと言つて芸術寄りの、学問的には結構あやしいことをやったりする分野です（笑）。でも逆に言うと、そういう文学的な人間が歴史学のさちんとした資料調査・分析に携わる人たち

と交流することになったこのシリーズは、私だけではなく、シリーズに参加した文学関係の人たちにとつても、有益で刺激的な交流の場になったと思います。

準備段階では、研究会を定期的に開催して、著者のなかの比較的若い人たちに執筆の論文について報告してもらい、みなで議論しました。こういう地道な努力を重ねる準備の段階がすでに学問的交流の場になりました。

研究対象としてのユーラシア世界はまさに「越境」と「変容」の場で、従来の境界では区切れないようなもの、多文化的なもの、境界がよく分からないまま広がっていく空間、そういったものの宝庫です。一方で地球では英語を中心としたグローバルバリエーションが押し進められ、学問の世界でも「英語さえわかれば世界がわかる」という風潮がある。そういうものではないユーラシア世界というめくめるめく多言語的・多民族的なフィールドがあることを示せたのではないのでしょうか。

「変容」に関して言うと、この地域に関わっている人間としては、ソ連解体後、実務的に非常に困ったことがありました。一体、自

分の研究対象の地域を何と呼んだらいいのかわからないんです。国際的な学会の名前もかなり激しく変わってきました。昔は「ソ連東欧研究」と呼ばれていたフィールドが「スラヴ・東欧・ユーラシア研究」と改称されたりした。社会体制の変化につれて、研究対象の呼び方そのものも変化してきたわけです。その変化をどういう枠組みでとらえたいのか、新しい枠組みを何と呼んだらいいのか。それもこのシリーズの課題であつたと思います。そしてそれなりに解答を出したという成果にはなっていると思います。

——シリーズの特長はどういったところでしょうか。

**塩川** さつき「地域の枠を超えた地域研究」というキャッチフレーズに触れましたが、その「地域の枠を超える」というのにはいろいろな意味があります。ユーラシア世界という広い世界のなかでさまざまな境界を越えるという意味も一つあります。もう一つは、「内」と「外」というのも、どこで区切られるかわからない。どこまでが内か、どこまでが外か定めがたいという意味では、より外側にまで

広がつていく可能性もあるわけです。さつき沼野さんが、ソ連という国がなくなつた後、あの地域を研究する上でどういふ言葉を使つたらいいかということで、いろんな団体が苦慮するなかで、「ユーラシア」といふ言葉が使われる機会が増えたということをおっしゃいました。それはそのとおりで、雑誌や団体などの名称が変更される際に「ユーラシア」といふ言葉を使うケースが多いというのは事実だと思ひます。ただ、それだけですと、これまでの「ソ連」といふ名称に代わるものとして、苦し紛れにでつち上げたといふような、ちよつと消極的な意味になりかねない。まあ、そういつたきつかけもまったくないわけではありませんが、それをより積極的に捉え直すこともできるのではないかと考えています。

というのは、「ユーラシア世界」は大まかに言うとかつてのロシア帝国およびソ連が支配していた領域がとりあえずは中心になりますが、その境界は流動的ですから、その外にまで視線を届かせる必要がある。これは何も政治的な意味での膨張主義ではなく、学問的に視線をより広く、遠くまで届かせるという

のは、非常に大事なことだと思ひのです。そういう観点から言ひますと、ユーラシア世界は、西と南と東の三方でいろいろな地域と接しているというのが一つの重要な点です。西には西欧があり、南には中東イスラーム世界や南アジア世界があり、東には東アジア世界があつて、そのどれとも接しており、部分的には重なり合つてゐる。である以上、ヨーロッパ研究とも、中東イスラーム世界研究とも、南アジア研究とも、東アジア研究とも、相互の対話を心がけながら研究しなくてはならない。そういう地域だと思ひます。

ですから、今回どこまで実現できたかはともかく、少なくともねらいとしては、さしあつたりの出発点はかつてのロシア帝国ないしソ連の領域だとしても、そこだけに立てこもることなく、議論の質として、ヨーロッパ研究を専門とする人たち、イスラームを研究する人たち、あるいは日本研究者とも対話できるような議論にしたいといふことを考えました。各巻のタイトルも、この地域特有の概念ではなく、他の地域でも問題になるようなキーワードを採用しています。ユーラシア世界ではこの問題が——たとえばディアスポラ

が、あるいは記憶とユートピアが——こういう形をとつて現れてゐるけれども、じゃあヨーロッパではどうだろうか、あるいは日本ではどうだろうかと問ひかけて、より広いさまざまな分野の人たちとの対話の一つのきっかけにすることを旨としたわけです。

——小松先生は中央ユーラシア研究をずつと進めておられますが、「ユーラシア世界」といふ地域設定の魅力はどのあたりにあるとお考えでしょうか。

小松 「中央ユーラシア」といふ地域を設定してみると、この地域の歴史と文化そして現代がよりよく見えてくるのではないかと、これこれも二〇年近く考えてきました。ロシア帝国とかソ連とか、中央ユーラシアの経てきた歴史的な現実を考えると、この作業を進めるにはやはりロシア・スラヴ研究とより密接に協同していく必要がある、ここは中央ユーラシア研究のほうでも、スラヴ研究のほうでもかなり進めてきました。それが一つの成果としてまとまつたのが、今回の『ユーラシア世界』ではないかと思ひます。

それぞれの巻をひもとけば、実に多様なテ

## ライフアーズ 罪に向きあう

坂上 香 人は自分の中につくりだした牢獄から自由になれるか。米西部の終身刑受刑者が自らの罪に向き合っていく20年を綴る。¥2730

## 最悪のシナリオ

巨大リスクにどこまで備えるのか

サンスティーン テロや大地震にどう向き合うのか。予防原則と費用便益分析のはざまに粘り強く考察。田沢恭子訳 齊藤誠解説 ¥3990

## サラエボで、 ゴドーを待ちながら

ソントダグ メイブルソープやパレバ、オペラからプロツキまで。華のある、まぶしいばかりのエッセイを集成。富山太佳夫訳 ¥3990

## リアさんて、どんなひと?

ノンセンスの贈物

リア リアさんて、こんなくだらぬ本書いて、さぞかしつむじ曲がりかも。笑いとペースに満ちたざれ詩集成。新倉俊一編訳 ¥3360

## 幻滅論

増補版

北山 修 古事記や浮世絵の分析から人のつながりを描出した代表作。日本の精神分析史を論じた「『日本人』という抵抗」を増補。¥2730

## 境界例研究の50年

笠原嘉臨床論集

〈境界例〉〈境界パーソナリティ障害〉概念の変遷と研究の昨今。「適切な治療距離」を重視した長年の臨床経験から描いた全8篇。¥3780

## シモーヌ・ヴェイユ選集 II

中期論集：労働・革命

労働のうちに存する不幸と自由、尊厳の問題を考え抜いた「工場日記」はじめ論考「展望」など未邦訳を含む12篇。富原眞弓訳 ¥5040

東京文京本郷  
5丁目32-21 **みすず書房**  
tel.3814-0131 fax 3818-6435 (税込)  
http://www.msuz.jp

ーマが出てくるわけですが、各巻を読み進めていくと、そこにとっても興味深いつながりや連関が見えてきます。このところがいちはり大きな魅力ではないかなと思っています。私も大いに啓発されました。これによって新しい研究の視角、あるいは具体的なテーマというものが見えてくるように思います。私自身は第三巻の『記憶とユートピア』で総論を書くことになりました。「記憶」という点について言えば——これはもちろんユーラシア世界のみならず、人間世界すべてに関わることなのですが——とりわけユーラシア世界という、転変に満ちた、きわめて動的な歴史をもつこの地域では、記憶のもつ意味が大きいのではないかと思われてなりません。

この巻を出した後にある本を読んできました。ユラシアの記憶に関してとても印象的な例を見つけることができました。城田俊『ことばの道——もう一つのシルクロード』（大修館書店、一九八七年）という本です。有名な『イーゴリ軍記』のなかに、興味深いけれども解釈が難しくだりがあるということと。どういうことかという、遊牧民ボロヴェツの捕虜となったイーゴリ公の従兄弟にあたる人物が、ある晩不吉な夢を見る。自分があたかも死んだような形で横たえられていて、そこに何者かがやって来て、苦く青い酒を何度も注いでくれた、と。そして異教徒の「トルコヴィン」——おそらくトルコ系の騎馬民族と思われまます——が使う矢筒から大

粒の真珠を胸にはらはらと撒いてくれて、結果としてその騒ぐ心が慰められた。そういうくだりがあるのだそうです。どうして真珠が撒かれたのかという点について、著者の説明はとても興味深いものです。古代ギリシアの歴史家が、今のウクライナから北コーカサスに至る草原を拠点にしてきた古代の遊牧民スキタイの慣習に言及しているというのです。すなわち、スキタイ人は眠りにつく前に矢筒を手にとり、もしその日幸せに過ごせたら白い小石を矢筒に入れる。うまくいかない一日であると黒い小石を入れる。その人が亡くなると矢筒が取り出され、中に入っていた小石が数えられ、白のほ

送ったと判断されたそうです。これをふまえると、先ほどの『イーゴリ軍記』の一節も、亡くなっても白い真珠が撒かれたわけですから、その人生はよきものであったということを知って、このキエフの大公は慰められたというように理解されます。

ある慣習に関する記憶が、古代のスキタイからキエフ・ルーシまで、千数百年の時を超えて伝えられていたとすれば、とても興味深いことです。おそらくユーラシア世界の場合には、こうした記憶のつながりがたくさんあったのではないのでしょうか。総論を書く前に、この本を読んでおけばよかったと悔やまれます。

——広大な地域だからこそ、時間的な幅もあるからこそ、そういうたものを発見する喜びは大きいのでしょうか。そういう意味では、文学研究者の方々がやっていらっしゃることにも今のお話は通ずるものがあるのかなと思うのですが、沼野先生、そのあたりをふまえていかがですか。

沼野 そうですね。文学というのは、国民文学という単位で見ると、一種の民族の記憶、

記憶の貯蔵庫のようなところがあります。今回、文学の立場からこのような多言語・多民族的な地域の総合的な研究シリーズに関わったわけですが、やはり研究方法、ディシプリン上の問題で、難しいけれどもだからこそ面白いことがいろいろありました。というのは、やっぱり文学研究というものは、一般的なイメージでは——ちよつとこれは古いイメージですが——ある国の外国語を一生懸命学んで読めるようになって、ドストエフスキーだとか、チェーホフだとか、特定の作家を研究する、と。そこで完結するわけですね。確かにドストエフスキー研究をやると言ったって、一生かかってもしきれない大変な仕事になってしまいます。そういう形で閉じてしまうと——「閉じる」という言い方には語弊があるかもしれないですが——そういう形で専門化してしまうと、それ以上広がっていかなくなる危険がある。欧米でもそうですが、日本の文学研究においても、どうしても国別・作家的別の縄張りをつくる傾向があります。だから昔の文学講座、たとえば岩波のものを見ても、地域別の巻が必ずありました。「ヨーロッパ文学研究の巻」とか、「日本文学」とか。

今回のシリーズでは、そういう縄張りの分類はやめていますね。先ほど塩川さんが言われたように、それぞれの巻が現代的な分野横断的な切り口で編纂されている。最近の文学研究もそういう方向で——たとえば「ロシア」、「アメリカ」、「イギリス」とか、そういう分け方ではなく——国を超えて、言語を超えて、違う国の文学に携わっている研究者どうしが同じ土俵で語り合えるような、そういう場に行くことが必要になっているのだと思います。

私自身は、文学といってもロシアだけではなく、ポーランドをやったりアメリカに行ったり、日本文学にも関わっているというところで、最初からちよつと居場所が定まらないような人間ですが、そういう人間だからこそ、専門を超えて視界が開けてくる場をつくりたいという思いがありました。今回のシリーズはありがたいことにちよつといい場になりました。

シリーズに参加してくれた文学関係の研究者も、ある一国の言語についてある一人の作家のテキストを研究するというような伝統的な枠を皆さん超えてやっているように思います。

す。旧ソ連時代のロシア・ソ連研究者はロシア語中心主義的な——ロシア語さえわかればだいたいどの地域の文学もわかるというような——ところがありました。まあ、実際、フ

ールドワーク、留学などでソ連のいわゆる民族共和国などに行くのも難しかったわけです。ところが、いま、中堅・若手の人たち

は、われわれの世代では実際に行きたくても行けなかったようなところに自由に入っていると思いますね。その結果、ロシア語中心主義というようなものからは、かなり解放されたところがある。ロシア語は最低限やっばりできたほうがいいとは思いますが。今までは考えられなかったようなガリツィア（西ウクライナ）の多文化的状況とか、旧ユーゴのデ

イアスポラとか、新しい視点で文学にアプローチできるようになってきたということが言えると思います。

私自身は第二巻『ディアスポラ論』の総論を執筆しました。昔から亡命文学については考えてきたのですが、新しく、広く見直すという意味では、今回は自分にとっても大いに勉強になりました。

いま小松さんが非常に面白い例を出されたので、私もちよつと。ヤーン・カプリンスキという、父親がポーランド人、母親がエストニア人、詩作はエストニア語で行う現代の詩人がいます、この人が「東と西の境界」という詩を書いていきます。

東と西の境界はいつもさまよっている東に行ったり、西に行ったりそれがいまだこにあるのか、正確にはわからない

〔中略〕北を向けば心臓は西南を向けば心臓は東そして口はどちらの側の代弁をすべきなのか

こういう詩なのですが、非常に鮮やかに出ているのは、東西の両方の要素を自分のなかに取り込んでいて、自分のアイデンティティが複合的であるというだけではなく、どっちを向くかによって、どっちの側につくかとい

# 高校倫理からの哲学

全4巻1巻別 直江清隆 越智貢 編集

身近な話題を出発点、対話やコラムも使いつつ、高校倫理の内容を織り込んで読者とともに考えていく入門書。

- 既刊・続刊 白抜き文字
- ① 生きるとは
  - ② 正義とは
  - ③ 自由とは
  - ④ 災害に向きあう
  - ⑤ 知るとは

## 【岩波テキストボックス】 国際倫理学

リチャード・シャブコット  
松井康浩、白川俊介、千知若正 継  
国境を超える援助と介入の  
理論的基礎を考察  
A5判・定価3465円

## 砂漠と文明

—アプロ・ユーラシア内陸乾燥地文明論—  
嶋田義仁  
新たな人類文明史観を提起  
する。 四六判・定価2940円



岩波書店

東京・千代田・一ツ橋  
[定価は消費税5%込み]

<http://www.iwanami.co.jp/>

うのが変わり、揺れ動くこと。つまり、視点によって方位も変わってくるわけです。「東と西」とか、「南と北」とかいう概念そのものが相対的であって、越境的なものを扱う際には、視点によって見え方が変わってくる。

第二巻の総論で書いたように、移住先の立場から見るのか、祖国の立場から見るのかによって、論そのものの方向性が大きく変わってしまうわけです。カプリンススキの詩は、そういうことを思い起こさせてくれます。そういった問題も視野に入れながら、この第二巻では「ディアスポラ」という視点から、少し、新たな光を当てることはできただかなと思っ

ています。

——シリーズの編集にあたって特に留意された点がありますか。

**塩川** 今までの話をもうちょっと具体化しますと、分野間の垣根を超えての相互交流を、実際の編集作業においてもできるだけ徹底しようと思いました。というのは、数人の編集委員が協力して何巻かの本を編む場合、わりと手っ取り早いのは、「どの巻は誰その責任編集」と割り振ってしまうことですね。そう

いうやり方をとると、その巻はその責任編者だけの個性によって染め上げられてしまうことになりやすい。そういうことをしないで、全巻にわたって三人の編集委員が緊密な協力体制をとったという点は、一つ強調したいんじゃないかと思っています。

もつとも、三人だけではちょっと足りないので、第一巻については宇山智彦さんに助力を仰ぎましたし、第四巻については松井康浩さんの助力を仰いだわけですが、とにかく編集委員の三人は第一巻から第五巻まで、すべてに同じように関わったわけですね。ですからどの巻も、「小松さんの要素」と言いま

すか、小松さんのお弟子さんの人もいれば、「沼野さんの要素」、沼野さんのお弟子さんの人もいれば、私に関係する人もいるという感じになっているわけです。専門分野のクロスオーバーが徹底していると言っているのではないかと思います。

それからもう一つ、別の話になりますが、この地域の一つの大きな要素としてソ連という存在がある以上、「社会主義」というテーマをどうしても考えないわけにはいけません。かつてはそのテーマが、いわば特権化される

ような状況がありました。ところが、近年はその反動として、「もう社会主義の問題はうんざりだ、すっかり忘れ去りたい、無視してしまいたい」というような風潮も一部にある気がしています。しかし、社会主義というものがこの地域で、特に二〇世紀を通じて非常に大きな意味をもったということは、好むと好まざるとに関わらず事実なわけですから、歴史研究の観点からはこれを無視することはできない。ただ、かつてのように特権化するわけではなく、「他のテーマと並ぶ重要なテーマではあるけれども、それなりに大きな重みをもつもの」という形で取りあげました。

このシリーズには、ソ連以前の古い時代を扱った章と、ソ連が存在していた時期を扱った章と、もうソ連がなくなった現代を扱った章とが、ほぼ等分に並んでいるということで、わりとバランスよくできたように思っています。

**小松** 留意点ということで一つだけ追加しますと、すでに塩川さんも言われていますが、今回の企画では「ユーラシア世界」という、それ自体が巨大で複合的な空間を扱っていま





## カエサル (上・下)

エイドリアン・ゴールズワーシー  
先見の明のある偉人か、それとも法を無視して権力を独占した野心家か。気鋭のローマ史家が贈る、歴史書としてのカエサル伝。宮坂渉訳

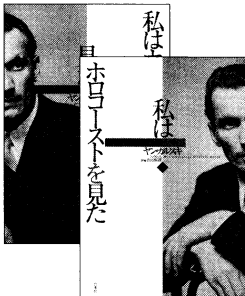
各4,620円

## 私はホロコーストを見た (上・下)

黙殺された世紀の証言  
1939-43

ヤン・カルスキ／吉田恒雄訳  
『ショアー』の証人の一人、ポーランド・レジスタンスの密使による奇跡的な証言。21世紀に語り継がれる、記録文学の傑作。

各2,940円



東京都千代田区神田小川町3-24  
<http://www.hakusuisha.co.jp/>  
Tel.03-3291-7811 ※価格は税込

白水社

す。しかし、他の分野や領域を研究されている方にも関心をもっていただきたいというところが、このような五巻のタイトルでもできたわけですね。同時に、たとえば最初の段階で「どなたに書いてもらおうか」ということを考えたときに留意したのは、それぞれの専門できちんと仕事をされているということとはもともとですが、それを他の領域や分野の人にも語れる方にお話ししようということでした。原稿ができたときにも、それができれば他の分野の人にもわかりやすい形で理解されるように、編者からさまざまなお願いをしたという経緯があります。『ユーラシア世界』と銘打っていますが、他の領域や分野の方にもぜひ読んでいただけるように留意して編集

作業を進めました。  
**沼野** これは本来、塩川さんがいけばよく考えられていたことで、私が言うことでもないかもしれないのですが……執筆者を選ぶときに、ちよつと「世代交替」ということも意識しています。つまりこの編者三人は、そろそろ大学の現場から去っていくわけですね。この分野は非常に魅力的な方向に展開しかけているのに、中堅・若手がこれからどんどんやってくれないと発展していかないわけですね。だから、「なるべく若手を起用しましょう」という共通の方針がありました。シリーズ執筆者の年齢構成、平均年齢を調べてみたら面白いかもしれません(笑)。まあ、この種の学術的なシリーズや講座は、わりと偉い

先生ばかりが著者としてかたまりがちなのですが、今回は比較的中堅・若手と言える人たちが多く入っているのではないかと思います。博士論文書きたてで、「これからバリバリやっていくぞ」という人に書いてもらえませんでした。シリーズの大きな特長になっているのではないかと思います。  
今回は弟子とか学閥はほとんど無視した人選だったのでないでしょうか。編集委員の弟子だからとか、そういう選び方は三人ともまったくしていません。本当に日本全国いろいろな分野を見て、「これだったらこの人がいいんじゃないか」ということで決めていますから。それは学問的にはもちろんプロダクティブなこと、大変よかったと思

います。

それから、留意点と言えるかどうかわかりませんが、私はたしか編集部との装丁の打合せで、カバーデザインは「スッキリしていて、センスがよくて、インパクトがあるもの」がいいと申し上げました。というのは、ロシア関係の出版の企画をやる時、だいたい表紙がおどろおどろしい、変な絵になってしまふので。今回はおかげさまで希望通り、良い装丁になったと思います。「スッキリしていて、センスがよくて、インパクトがある」というのは、我々の研究のモットーでもあるべきでしょうね。

——シリーズ編集の過程で、新しい発見や気付きなどがあったかと思いますが、いかがでしょう。

塩川 そうですね。編集委員の当然の義務として、すべての章を原稿段階とゲラ段階とで読みましたが、単なる「義務」ではなく、読んでいるうちに非常に楽しく感じられるという経験ができたのは、大変幸せでした。四八本もの論文があつて、私の専門からは遠いものもかなりあるわけですが、どれも面白く読

めたというのは、こういう大きなシリーズでは稀有なことですね。

それから、それぞれの章が巻ごとのキーワードのもとに緊密に結ばれているというのは、編集段階でそういうふうを意識して配置したわけですが、できあがってみると、実は巻を超えた呼応関係があることに気付きました。これは、各巻ごとの構成が緊密であるだけではなくて、五巻全体もわりと緊密に結ばれているということではないかと感じました。

若干例を挙げますと、たとえば「ユーラシア主義」。これは第一巻のいくつかの章で主要に論じられていますが、第五巻の岩下明裕さんの章(第2章)でもまた取りあげられていて、呼応関係にあります。

それから「中央ヨーロッパ」あるいは「中欧」という地域。これはユーラシア世界と部分的に重なりながら、しかしそこからはみ出すというか、むしろできるだけ遠ざかろうとしている、そういうユーラシア世界のお隣のような、しかしお隣と言いつついいかわからない、非常に微妙な位置にある地域概念です。この「中央ヨーロッパ」「中欧」という

概念については第一巻で石川達夫さん(第4章)が書き、第五巻で篠原琢さん(第10章)が書き、似通ったテーマについて、異なった観点からの議論が出されています。この両者を読み比べるのは大変面白いだろうと思います。

その中央ヨーロッパの一部ですが、そのなかでも強い個性をもったガリツイアという地域。これは第二巻の加藤有子さんの章(第6章)と第五巻の篠原琢さんの章(第10章)で共通に取りあげられています。

また、ロシアとムスリムの関係に至っては、あちこちに例があるのでいちいち示しませんけれども、すべての巻を通じて大きな問題になっている。それから、もう一つ挙げれば、現代のバルト諸国における歴史認識の問題が、第三巻の橋本伸也さんの章(第5章)と第五巻の小森宏美さんの章(第4章)とで共通に取りあげられている。このような相互の呼応関係がかなりたくさんあるということに気がきました。

それからもう一方で、一つの章が複数の問題系と関わっているというケースがいくつもあります。たとえば第一巻の浜田樹子さんの

章(第2章)は、巻のタイトルどおり、まさしく「東」と「西」というテーマを扱っているわけですが、亡命知識人を扱っているという点では「ディアスポラ論」でもあるので、第二巻とも関わる。第一巻の前田弘毅さんの章(第5章)もそうですね。「東」と「西」というテーマを扱う一方で、アルメニア系グルジア人がペルシアとロシアでどう活躍したかという話ですから、「ディアスポラ論」のテーマでもある。また、第三巻「記憶とユートピア」のなかの濱本真実さんの章(第7章)は、やはり一種の「ディアスポラ論」とも読める。あるいは、第五巻の小森さんの章(第4章)と篠原さんの章(第10章)はどちらも「国家と国際関係」というテーマ

のもとに書かれています。同時に「記憶とユートピア」で論じられるようなテーマにも触れている。ということ、一つの章が複数の問題系と関わりながら、他の章とさまざまな呼応関係にあるということです。今回、こういうふうになくさんの章が呼応し合ってシリーズができあがりました。これを出発点として、特に若い方には、これから先、どんな次の大きな仕事に進んでいってもらえるんじゃないかと期待しています。小松 すでに塩川さんがほとんどすべて言われているので、あまり新しいことはないのですが、巻の別を超えた呼応関係のほかにいくつか挙げるとすれば、一つには、これはかなり意図的に試みたことですが、私としてはユ

ーラシア世界のなかに広がるイスラーム地域、その姿をできるだけ示してみたいと思っています。これは、個別の章で言えば第三巻の濱本真実さんの章(第7章)や第四巻の長縄官博さんの章(第3章)などになります。日本におけるイスラーム世界への理解ということを考えると、これまででは中東に偏りすぎていました。イスラーム世界やムスリム社会の実像をとらえるには、今回のようにユーラシア世界を舞台にした新しい論考が大きな意味をもつのではないかと考えています。それから、ソ連の解体から二〇年を経て、ようやくこの間の変貌についても確かな研究が現れてきていると実感しています。たとえば、第二巻のドイツ人に関する半谷史郎さん

【新刊】

感覚のフェビュリットゥスⅡ

## 味覚のイコグラフィア

蜂蜜・授乳・チョコレート

出・新保他著・上村清雄監修解説  
婚礼を言祝ぐ蜂蜜、カリタスを注ぐ乳房、エロチックな果物たち、断食という甘美な糧、そして新たな味覚、コーヒーとお茶とチョコレート、これらの絵画表象を舌から解き明かす。

定価 4725 円

ナショナル・ギャラリー・

ボケット・ガイド・シリーズ6

## 神話と伝説

絵画を楽しむための10の知的アプローチ  
M・グリフィス/田中純監訳  
ロンドンのナショナル・ギャラリーが誇る、初期ルネサンスから19世紀末までの世界でも有数のヨーロッパ絵画の中から厳選した作品を高精細のカラーでとりあげ、絵画の鑑賞を楽しむ知的で実践的なアプローチに誘う。

定価 1575 円

ヴァールブルク著作集別巻1

## ムネモシュネ・アトラス

アビ・ヴァールブルク

伊藤博明+加藤哲弘+田中純

ヨーロッパ数千年の記憶の地層を掘り起こすべく、イコノロジーの創始者ヴァールブルクが最晩年に対峙していた未完のプロジェクト、記憶の女神ムネモシュネの名を冠した図像アトラス(ムネモシュネ)を、構成する63枚のすべてのパネルを網羅的かつ統一的な方針の下に読み解き、そのすべてに解説を付して解説する。

定価 25200 円

## アビ・ヴァールブルク著作集

全7巻・別巻3

伊藤+加藤+田中 著/訳

別巻1『ムネモシュネ・アトラス』

別巻2『講演・エッセイ集(仮)』

別巻3『イメージの政治学(仮)』

## ありな書房

〒113 東京都文京区本郷1-5-15

TEL 03 (3815) 4604

の章(第7章)は大変新鮮でしたし、第五巻のウズベキスタンの経済変容を扱った野部公一さんの章(第6章)も、この間の変容を見事に整理されていると思います。

最後に、各巻の論考を読んでいくと、やはり日本を考える上でのいろいろな手がかりが見えてくるように思います。第三巻の橋本伸也さんの章(第5章)が取り上げたエストニアの歴史認識に関してもそうでし、第一巻の浜由樹子さんの章(第2章)が示唆するユーラシア主義とアジア主義との連関性、第五巻の橋誠さんの章(第8章)が扱った極東の国際関係もこれにあたります。そうした意味では日本の歴史、とりわけ近現代史を考える上でも、さまざまなヒントがあるとと言えるでしょう。

**沼野** 巻をまたがる連関については塩川さんが言われたとおりなので、あまり付け加えることはありません。文学・言語・文化関係としてシリーズに関わった立場から言うと、歴史に比べると文学関係の章はかなり少ないのですが、それでもそれなりのプレゼンスを示しています。どうしても文学の話は文学で閉じてしまうとところがあるのですが、このシリ

ーズのような、広く歴史、地域、さまざまな社会を研究するという場のなかに投げ込むことによって、文学をやる側にとっても有益で、そうではない人にとっても面白いと思う、そういう効果が出てくるのではないかと思います。

先ほどの繰り返しになりますが、従来あまり大きく扱われなかったような越境的なものとか、日本ではマイナーな言語とか、そういうところにもかなり大胆に入っていく人たちが増えている。それからユダヤ系……これは文学には必ずしも限らないのですが、ユダヤ研究の場合も、ユダヤの専門家の枠のなかだけでなく、ユーラシア世界という枠のなかに投げ込んでみることによって見えてくるものが違うのではないかとということです。

特に第二巻『ディアスポラ論』について言うと、越境的なものを対象にした際、歴史研究であっても、文学研究であっても、共通するものがないぶん見えてきます。たとえば、第3章の中嶋毅さんはハルビンのロシア人の教育システムのことを研究されましたが、もちろんハルビンには亡命ロシア人もたくさんいて、亡命文学という観点からの研究という

のも、いま併行して進んでいるわけですね。だからそういう流れのなかに、歴史研究だけでなく、文学・文化研究も入れてみると、多分野的な交流によって、相乗効果が出てくるのではないのでしょうか。

——今後の課題、次なる可能性など、お聞かせください。

**塩川** これまでは「どういうことを目指したか」ということと、「ある程度は達成できた」という話をしましたけれども、振り返ってみると、十分達成できなかった面もたくさんあるなども感じていきます。

一つは対象地域のことです。何度か申しましたように、ユーラシア世界とは、とりあえずはかつてのロシア帝国およびソ連の領域を主に念頭においた概念ですけれども、どこまでが「内」か「外」か確定しにくいというのが一つの特徴ですから、その枠にとらわれずに、もつと広く考えようということで、ロシア帝国とか旧ソ連諸国という枠をはみ出した地域を論じた章もいくつかあります。そうではあるのですが、それらの数は比較的少なく、やはりロシア帝国ないし旧ソ連関係が大

部分になってしまっている。ここはもう少し広げて、思い切ってより遠い地域との相互関係というようなことも、今後積極的に取り込んでいったらいいのではないかと感じました。

それから、日本との関係も、あちこちで触れられてはいますが、主題的に取り上げられているのは第二巻のメルト・ハン・デュンダルの章(第8章)だけです。ここは多少弱かったかなという気がして、今後の課題です。

もう一つは、学問分野を超えた対話ということを最初から心がけており、かつ、一定程度実際に進めてきましたが、これももともとと積極的に推し進める余地があるのではな

いかという気がしています。「地域研究の枠を超えた対話」と「ディシプリンの枠を超えた対話」、掛け声はよく掛けられるけれども、いずれも実践するのは難しい。今回、我々の力量の範囲内で行えることをやったつもりではありますが、今後もっと積極的に進めることが課題だろうと思っています。

それと、沼野さんが先ほど中堅・若手を多く起用したとおっしゃいました。そのとおりではあるのですが、若手については本当はもつと起用したかったといううらみがあります。一つの事情として、若手の人はどうしても自分の主要なテーマを掘り下げることに集中するので、それを広い読者に説明するということにまでは手が回らない。そのため、個

別研究としては非常にすばらしいものをもっているけれども、それをより広い文脈で説明する準備がまだない人たちは今回の執筆陣から外れています。もちろん、今後は、今回参加しなかった若手の人たちが、これを踏み台にして、どんどん新しい仕事をやっていくことを願っています。

小松 今の塩川さんのお話ともかなり重なりますが、今回のシリーズによって、ユーラシア世界への実に多彩なアプローチが全五巻にまとめられました。これをここで終わりにするのではなく、むしろこれを出発点として、さまざまな協同の機会をつくってほしいと思います。これは希望をこめた課題と言

## 丸ロ=ポンテと病理の現象学

●澤村哲生著 メルロ=ポンテが論じた〈病〉の包括的検討を通し、思想の新たな地平を切り拓く。 ¥3990

## 晩 禱

—リルケを読む—

●志村ふくみ著 いま、リルケを読み、リルケを想い、リルケを生きる。染織作家で指折りのエッセイストが語り下ろした祈りの境地。 ¥2940

[改訂版]

## 子どもが地球を愛するために

—〈センス・オブ・ワンダー〉ワークブック—

●M・ラチェッキ他著 山本幹彦監訳 南里憲訳 1999年に発行された環境教育の名著、待望の改訂版。 ¥1890

## 核エネルギー言説の戦後史 1945-1960

—「被爆の記憶」と「原子力の夢」—

●山本昭宏著 被爆の記憶があったからこそ、原子力の夢へと向かった戦後日本。 ¥2520

## マンダラ国家から国民国家へ

—東南アジア史のなかの第一次世界大戦—

●早瀬晋三著 ヨーロッパ列強が壊滅的な戦争をはじめたとき、東南アジアは、具体的にそれにどうかかわり変容を迫られたのか。 ¥1680

(表示価格は税込です)

## 人文書院

京都市伏見区竹田西内畑町9  
☎075-603-1344 FAX075-603-1814  
http://www.jimbunshoin.co.jp/

このシリーズの準備段階で、一年間ほど研究会を続けましたが、いずれも大変充実したものでした。歴史や文学、哲学、人類学などデイシプリンの別を超えて議論する機会を得ましたが、それが結果としてやはり大きな効果をもったのではないかと思います。そういった意味も含めて、より若い世代の皆さんがそういう機会——たとえばシンポジウムとか研究会とか——を積み重ねて、いずれまたこうしたシリーズを作っていくことができれば、人文学全体にとっても大きな力になるのではないかと考えています。

**沼野** いまお二人が言われたことにまったく同感です。若手に関して言うと、博士論文をそんなに時間をかけずに書くようにして、それを研究のスタートにする傾向が、文学の分野でも最近出てきています。しかも成果を単行本にしている人たちがずいぶんいるわけです。今執筆筆者には入っていませんが、鶴見太郎さんや秋草俊一郎さんのように、東大出版会から非常にいい本（それぞれ『ロシア・シオニズムの想像力』、『ナボコフ 訳すのは「私』』を出している若手もいます。それから、ブルガリア人で比較文学をやっている、

デンニツァ・ガブラコヴァさんは、魯迅から説き起こして日本の近代文学における雑草のイメージを追って現代文学にまで至る、という力業を見せてくれました（『雑草の夢』世織書房、二〇一二年）。こういう非常にレベルの高い博論を書ける人たちのプラットフォームのようなものがつくられなければいけないというふうに思います。

いまお二人の言ったことにさらに付け加えるならば、大学における教育・研究の枠組みも、やはり学問の発展・変化とともに、徐々に変わっていく必要があると思うんです。たとえば「ユーラシア研究科」というような名のつく、「ユーラシア世界を研究します」という専攻学科は、大学にはあまりないわけです。少なくとも文学では、わりと旧態依然とした枠組みしかない。だから、ユーラシア世界のような新しい研究分野として可能性があるものに対応できるような枠組みが——特にさっき言ったような、若手の優れた研究者たちが集えるような場として——大学レベル、研究機関レベルでも、できるといいなと思います。

シリーズへの率直な感想としては、この分

野の専門家以外の人たちに開かれた、非常にいいものにはなっていると思うのですが、専門性が高くてちょっと難しいかなという気もするんですね（笑）。ただ、そのせいで読者や他分野の若手研究者をデイスカレッジしているわけではなくて、やっぱりこの分野は非常に不定形で、多様で、多言語的だけれども、魅力的なんだということを示せるシリーズになったと思います。

それからもう一つ、いかに言葉の勉強が大事かということですが。この『ユーラシア世界』シリーズには、英語だけしか知らないのではまったく通用しない、聞いたこともないような言語をやっている人がいっぱい入っている。これはすばらしいことです。未知の言語の世界に分け入る研究の難しさと同時に、魅力というものをまだまだ切り開ける未踏の沃野であるということ、それが、若い人たちに伝わると思いますね。

——ありがとうございます。完結して終わりではなく、これを始まりとして、今後どのように先生方の研究に役立てていくかというのが出版社の務めかなと改めて思いました。

最後に、何かまどめの言葉などありましたら  
お願いします。

**塩川** まどめというほどではありませんが、  
楽屋話のようなことを少し。われわれ編集委  
員三人でここ数年ずつと協力してきました  
が、これはかなり異色の組み合わせなわけ  
です。というのも、三者三様に専門を異にする  
わけですね。小松さんは、地域で言えば中央  
アジアを中心とするイスラーム圏、デイス  
プリンで言うところの歴史学。沼野さんは、地域で言  
うところのロシアから西スラヴ、さらには「世界文  
学」、デイスプリンでは文学研究。私は、地  
域としてはロシア・ソ連で、デイスプリンは  
やや曖昧なのですが、半分歴史学で、半分政  
治学のような、ちょっと又エ的などころがあ  
ります。こういうわけで、三人それぞれ大き  
く違うわけです。

ですから、ある時期までは、この三人のう  
ちの二人がどこかで接点をもつことはあつて  
も、三人そろって顔を合わせるとのこと  
は、まずなかったと思います。そういう異色  
の顔ぶれを取り合わせることで、何かこう、  
火花が散って、新しいものができるのではな  
いかということ、あるときフツと思いつい

て声をかけたら、お二人とも快く私の話にの  
つてくださいました。それまで違うバックグ  
ラウンドで育ち、違った形で仕事をしてきた  
人間が、思いがけず合流することの妙味と言  
いますか。それが今回、わりとうまい具合に  
結実したという感じがしています。そのことが  
中身にも反映したんじゃないかなと言うと、  
自画自賛に過ぎるでしょうか（笑）。

（二〇一二年七月二〇日、スラヴ文学演習室にて）

編集委員 塩川伸明・小松久男・沼野充義

## ユーラシア世界（全五巻）

A5判・平均二八〇頁・各巻四七二五円

### 1 〈東〉と〈西〉

### 2 デイアス・ポラ論

### 3 記憶とユートピア

### 4 公共圏と親密圏

### 5 国家と国際関係

東京大学出版会（表示は税込価格）